九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

評判するということ

入口，敦志
国文学研究資料館助手

https://doi.org/10.15017/9387

出版情報：語文研究. 86/87, pp.139-149, 1999-06-04. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

評判するということ

入口敦志

1、はじめに

江戸時代において「評判」という言葉でまず思い出されるのは「評判記」とよばれる一群の書物である。当代の遊女・役者について品定めをしたものに始まり、その後更に各種評判記として板行され盛行したことはあらためて述べるまでもない。

その評判記の淵源に『太平記』講釈と密接に関わる『太平記評判秘伝理尽鈔』なる書物が存在することも既に諸家により指摘されており、その影響を受けてこれまた各種軍記物語の評判が出版されている。そのような状況の中で、軍記物にも属さない、また、所謂評判記類にも属さない「評判」という題号をもつ仮名草子が出版されている。

そのような仮名草子のうち浅井了意の『可笑記評判』を軍記評判の流れに位置づけてその意義を考える論考（「仮名草子　評・注の文学―『可笑記評判』を中心に」『大妻女子大学文学部三十周年記念論集』所収　平成十年三月刊）が近時花田富二夫氏によってなされている。本稿では花田氏の驥尾に付して、軍記物語でもなく、また、遊女・役者の評判記でもない仮名草子時代の「評判」という題を持つ作品のいくつかについて考察することで、仮名草子の特質の一端を明らかにするとともに、「評判」するということの意味について考えてみたい。

2、「評判」の意味

軍記物語における「評判」を刊行順に並べてみる。▼を付したものは仮名草子、※を付したものは所謂「評判記」であり参考までに入れてみた。

寛永十年（一六三三）頃　『太閤記』刊
寛永十九年（一六四二）▼『可笑記』刊
正保二年（一六四五）　『太平記評判秘伝理尽鈔』刊
慶安三年（一六五〇）まで『太平記評判私要理尽無極鈔』刊
慶安三年（一六五〇）　『平家物語評判秘伝抄』刊
明暦元年（一六五五）　※『桃源集』刊
（現存最古の遊女評判記）
万治三年（一六六〇）▼『可笑記評判』刊
万治三年（一六六〇）　※『野郎虫』
（現存最古の野郎評判記）
万治四年（一六六一）　『甲陽軍鑑評判』刊
寛文十二年（一六七二）▼『徒然草嫌評判』刊
（寛永十三年成）
天和元年（一六八一）　『川中島合戦評判』刊
貞享二年（一六八五）▼『竹斎療治之評判』刊
貞享三年（一六八六）▼『古今百物語評判』刊
（寛文十二年以前成）
貞享四年（一六八七）　※『野郎立役舞台大鏡』刊
（狭義の役者評判記の始め）
元禄三年（一六九〇）　『古戦評判』刊
元禄十六年（一七〇三）『義経記評判』刊
正徳二年（一七一二）　『平家物語評判瑕類』刊
享保元年（一七一六）　『曽我物語評判』刊

軍記物語の評判は次々に刊行され、加美宏氏が「この十七世紀半ば頃は、軍記評判という新しいジャンルが確立された時期ということができる」（「評判記の先駆—軍記評判」『太平記の受容と変容』所収　一九九七年　翰林書房刊）と記すとおりの様相を呈する。そして加美氏は軍記評判を遊女・野郎・役者等の「評判記」の先駆と指摘する（「『太平記評判』に関する補説」『太平記の受容と変容』一九九七年翰林書房刊所収）のであるが、まずはその嚆矢と考えられる『太平記評判』について「評判」ということの意味をみておきたい。

他の軍記物に比して『太平記』に批判書・評判書が特に多いという点について加美宏氏は、

このような批判書の続出が、『太平記』独自の現象であるということは、当然のことに、『太平記』そのものが、そうした批判書を続出させる要因なり、性質なりをはらみ持った作品であることとかかわってこよう。『難太平記』『太平記批判記』などが出現する背景には、『太平記』が、その成立の当初から、さまざまな政治的な圧力や書き入れ削除などの要求をうけつつ生成・成長していったこと、それと関連して、とくに足利方の有力武士の間には、『太平記』を南北朝期の「正史」のごとく見なし、一族一家の勲功録・軍忠状的なものと見なす傾向が強かったことが、まず考えられる。（中略）第二に、半世紀に及ぶ南北朝の内乱をねばり強く追跡し、克明に描いている

『太平記』は、必然的に、動乱期のさまざまな事件・合戦、多様な人物を描きわけており、乱世の政治や軍事の、いわば百科全書というべき作品となっていることも、前記のような評判書の輩出とかかわりがあろう。（「『太平記評判秘伝理尽鈔』をめぐって」『太平記享受史論考』所収　昭和六十年五月　桜楓社刊）

という見解を示している。また中村幸彦氏は『太平記』評判書と関係の深い太平記読みについて、

しかし物語僧の弁舌に断腸しているだけならば太平記読みの大流行はなかったであろう。足利の世も末に至って、再び天下大動乱の戦国時代に突入する。『太平記』は過去の物語としてよりは、当面の戦乱下の政治と戦争への教訓を、無限に包含する書物と見られるようになって来た。（「太平記の講釈師たち」『中村幸彦著述集』8所収）

と記しまた別に、

この書（太平記）を鑑として、そこから政治・軍学などの様々の教訓を得ようとしたもので、この批判は講義の眼目であり、講者の見識を示す所であった。（「太平記理尽抄資料　解題」『日本庶民文化史料集成』8所収　一九七六年　三一書房刊）

とも記している。

以上の言を総合すれば、『太平記』における「評判」は、単なる意見・思想の開陳だけではなく、現実に即したある種実践的な教科書として意図されていたということである。それは『太平記評判秘伝理尽鈔』の奥書に「右太平記之評判は、武略の要術、治国の道也」（『日本庶民文化史料集成』8所収　一九七六年　三一書房刊。原漢文を訓点に従って私に読み下した）とあることからも裏付けられよう。

そのことをほかの資料からみてみる。

『文体明弁』の「評」の項目には次のようにある。

評　按に字書に云く、評は品論なり。史家褒貶の詞なり。蓋しいにしへは史官各々論著ありてもって一時の君臣言行の是非を訂す。然れども意に随ひて名を命ず。一に協ふことなかれ。故に司馬遷史記に太史公の曰くと称す。しこうして斑固の西漢書則ちこれを賛と言ふ。范曄の東漢書又これを論といふ。その実は皆評なり。しこうして評の名は則ち始めて三国志に見る。後世これに縁て作者漸く多し。則ち必ず身史局にあり、手に史筆を秉りて後にこれをなさずや。故に二評諸文粋に載す。しこうして評史蘇文忠公集中に見る。蓋し文章の一体なり。今陳寿の史評をもって主となす。しこうしてその他の作者もまた並びに列す。分けて史評雑評の二品となすといふ。（『文体明弁粋抄』下24オ～24ウ　寛文元年（一六六一）刊による。原漢文、本文に付された訓点をもとに私に読み下した）

加美氏の言にあるように『太平記』を正史ととらえようとする当時の立場からは、『太平記評判』はまさに「史官」による「評」にも匹敵するものとして権威づけることができるわけであり、その背景に『文体明弁』にあるような文章観があったということであろう。『太閤記』における「評」にも同様の意図があると考えられる。

さらに、正徳二年刊と時代は下るが、『平家物語評判瑕類』には「今按に、平家物語は元来稗官の史、兎園の策なれば、評を加ふるにたらぬものなれど」という記述があり、「評」を加えるということを、『文体明弁』に言う「史評」に添うようなかたちでかなり厳密に使っていたことをうかがわせる。その意味では『曽我物語』も『義経記』も事情は『平家物語』と同じはずであり、実際にこれらの評判が『平家物語』を除いて元禄以降とかなり遅くになってから刊行されていることと関わりがあるのではないかと考えられるのであるが、その点については後考を待ちたい。

一方所謂「評判記」類には、

まさに評判記の評判記たる所以は、その当代性という一点にあり、当時の読者はその故に喜んで読み、後世の我々からみても、まさにその一点に他の何物にもかえがたい貴重さが存在する（『江戸名物評判記案内』岩波新書一八九五年九月刊）

という中野三敏氏の指摘にあるように、「当代性」が最も重要な要素としてあげられる。『太平記』における「評判」にも、先に引用した加美氏や中村氏の指摘するとおり「当代性」といったものが色濃く含まれているわけであり、『太平記』の評判は後の「評判記」類の淵源としてふさわしいといえよう。その意味でも、『太平記』とそれに続く時代を扱う『甲陽軍鑑』と『太閤記』は、戦国の余風の残る江戸の初期においてはまさに「当代性」を備え「評判」されるに足るものであったろうが、先に述べた『平家物語』や『義経記』などは正史云々ということからだけでなく、「当代性」といった観点からも「評判」されるにはやや問題があると意識されていたのではないだろうか。

以上駆け足で軍記物語における「評判」ということをみてきたが、では、まさに当代の、しかしながら文芸である仮名草子における「評判」はどうであろうか。次にそのことを『徒然草嫌評判』と『竹斎療治之評判』というに作品に即して考えてみたい。

3、『徒然草嫌評判』

これは題名の通り『徒然草』を非難した書。作者等のことは不明であるが、聞き役に寛永十三年の春に筑紫から江戸へ出てきた男と、講者として同じく筑紫の八十になる禅門を設定している。その人物は、

この禅門と申は若年より異国にわたり、天竺其他国々徘徊して三十余年異国に住居し、五十余年の年に帰朝し、医師をして国々ありきけるが、当時此御地に有ぞあふ。

（吉田幸一編『徒然草嫌評判〈寛文版〉』古典文庫　昭和五十六年刊。私に句読点・漢字等を施した。以下同）

と異国帰りとしているのが珍しい。

それと関連してか他書には見られない内容を吟み、新村出氏の指摘（「南蛮関係の一資料」『新村出全集』第十一巻所収昭和四十九年　筑摩書房刊）にある通り興味深いものであるが、本稿の主旨ではないので深く立ち入らず、「評判」という点からのみ考察してみたい。

ただし、前にあげた「評判」の年表をみてもわかるように、この『徒然草嫌評判』の成立年は「評判」としてはあまりに早い。寛永十三年（一六三六）は、『太閤記』（寛永十年刊）がかろうじて刊行されてはいるものの、『太平記評判秘伝理尽鈔』も『太平記評判私要理尽無極鈔』もまだ刊行されておらず、『太平記評判秘伝理尽鈔』が刊行される正保二年（一六四五）までにはまだ十年ほどあるという年である。吉田幸一氏の古典文庫の解説によると、文中に引かれる『野槌』や『甲陽軍鑑』を刊本で見たと考えれば、明暦頃まで成立が下がると考える必要があるようであるが、一方『野槌』や『甲陽軍鑑』あるいは『太平記評判秘伝理尽鈔』などを写本で見ていたとすれば成立年を下げる必要もない。

しかし『徒然草嫌評判』は、以下述べるとおり「評判」としては典型である軍記の評判とは違う部分が多い上に、成立について述べた首尾の部分に「評」または「評判」という言葉が使われていないことからも、成立時点では「評判」という書名は念頭になかったのではないか。おそらく寛文十二年（一六七二）、刊行されるに際して「評判」の名を付けたものと想像される。吉田幸一氏蔵本の寛文十二年の刊記の部分は、古典文庫の影印で見ても入木であるとわかるものであり、刊行はそれ以前の可能性があるが、以上のことからそれほど遡ることはないと考えてよいであろう。

本稿では、寛文十二年頃の刊行時に命名されたとしても、少なくとも「評判」という名を付して不自然ではないと考えられていたであろうという点を重視して、その時期の「評判」として考察する。

この書の内容は『徒然草』とその作者吉田兼好を徹底的に非難・中傷したものなのだが、その一例をあげてみる。『徒然草』第二十二段の「何事も、古き世のみぞしたはしき。今様は、無下にいやしくこそ成りゆくめれ」という言葉について尋ねられた禅門は、

よく腹にあぢあふて見たまへ。昔の世がよくて次第に悪しくなるならば、世界に人間の種あらんや。昔の世ばかりしたふはよからぬ事なるべし。日輪の出給ふ所も正月より始め、月々に入せ給ふ所も変はりさぶらへ共、もと

の季に帰るごとくに、人の世の中もよき世も有り、悪しき世も有り、中なる世も有れば、唯四季の移り変はるごとくと知るべし。（略）昔が良くば人の家もなし。畜類のごとくに穴の中に人々住みしとなり。是を良きといふべきや。人間は智恵あるによりて、次第に賢くなり、昔のわろきことを捨て、良きことをなし、又昔なき事を仕出して、世は次第に良くぞなりもてくる。

と答え、武道具が弓から鉄砲になったこと、版行の技術が出来て書物が遠国にまで行き渡るようになったこと、明国より銀吹きの法がもたらされ国中に銀が満ちていることなどを、昔より今が良くなった例としてあげ、説明する。万事この調子で、すべてにわたって『徒然草』批判を展開している。その批判の根底は、冒頭部分での、

抑、此徒然草は吉田兼好法師といへる人が作とかや。儒道・釈道を初め、うき世に有事のあられぬことを書たる書なりと見えたれども、まことの儒釈道を知らず、皆天理にちがひ、釈道をそむきぬる書なり。さて兼好法師いかなる者ぞと思ふに、第一慢心、第二恋慕、第三欲心深き、世のわろきこと皆備りたる人間成りし。畢竟は気のちがふたる、うつつなしと知るがよし。

という評価で一貫している。二・三箇所の褒めている部分でも、

兼好云、物は不具なるこそよけれ。内裏造られぬるも必つくりはてぬ所を残すと書り、か様に又よき事もあまた徒然草の内に書入をくによりて、いよいよ気の違たると知れり。

と、ほとんど言いがかりのようにして結局はおとしめることになる。そのような『徒然草』でも、

この徒然草は、わ殿などがよみてよからぬ物なり。中々に源氏物語などはよくぞあらん。さりながら、橋がなくては渡りもならぬ。此徒然草を種として物教へ侍らん。

と、批判すべき悪書でも教訓は引き出せるのだという理屈をつけて「評判」の対象としている。その著述態度は『太平記』の「評判」や「評判記」が、対象に密接に即して成り立っているのと全く違っており、著者の意見や思想を述べるためにたまたま『徒然草』を俎上に上げただけというべきか。現に内容には『徒然草』とは何の関連も持たない記事の羅列も多い。重松信弘氏の、

（この）草子の旨を甚だしく嫌悪し感情的に兼好を排撃してゐる。（中略）「嫌評判」は全く順序もなく思ひついた点で悪口雑言を事としたもので全然学問的価値のあるものではない。（「徒然草研究史」『国語と国文学』六十一号所収　昭和四年六月）

との『徒然草』研究史上の意味を認めない評も首肯される。ただ、「感情的に兼好を排撃している」というのはどうであろうか。全体の書きぶりからして、兼好と『徒然草』憎さのあ

まりに書かれたというよりも、先に述べたように、著者の思想を述べるためにたまたま『徒然草』を取り上げ、徹底的に批判することで自分の思想の優位を示そうと意図しているように読める。

次に、先に見た『文体明弁』と関連する興味深い記事を引用する。

源氏物語ははじめから終までうらおもてなく恋路なれば、中々にかたづきて吉。かへって人の教訓に成べし。悪人は善人の鏡なり。煩悩則菩提心なり。むかしよりも恋路よりして道心したる人多し。又、此源氏物語は我朝の史書とぞ思ふ。もろこしには史書官とて、内裏に居て、当王の悪事を書て後王のかがみとする。此源氏物語も内裏仙洞の道にちがひ給ふ恋慕、又は公家達の事をかきぬるは、ただ大明の史書官也。唯徒然草のごとく、よろしき事を書くかとすれば、又、恋路のふかき事を書。何ともしれぬ物なり。

先に引用した『徒然草』と『源氏物語』の比較と同様に、引用した前半の部分では『源氏物語』は反面教師ながら恋慕のことを書くという一貫した姿勢を評価しているのに対して、後半では史書官が後の帝王の鑑として書いた物だから良いのだという理屈で『源氏物語』を持ち上げている。中国の史書官がただただ恋慕のことだけを記した史書を書いたかどうかの当否は問わないが、史書官が書いた物だから手本となるという記述は、『文体明弁』そのものの影響とまでは言い切れないにしても、『文体明弁』にみられるような文体意識がかなり深く浸透していたことをうかがわせる例として特筆すべきか。先に述べたとおり、内容からみると、この『徒然草嫌評判』は軍記物語の「評判」とはかけ離れたものであるが、「評判」の対象としての「正史」の位置付けという点で軍記物語の「評判」と一致した見解を示していることは、「評判」するということを考える上で重要であろう。

4、『竹斎療治之評判』

この作品は、『竹斎』をうけて次々に出版されたいわゆる竹斎もののひとつ。ほかの竹斎ものが竹斎という人物のみをとって滑稽話をその人物に仮託して書かれているのに対して、この『療治之評判』はもとの『竹斎』における名古屋での療治噺をとりだしてそれに即して書かれているという点で特異なものである。本稿の注目点である「評判」ということについてみれば、題目だけからは『竹斎』における藪医者竹斎の療治の一々に対して、批評・批判を試みているものと思われるのだが、実際のこの『療治之評判』における評判は竹斎の療治自体を評判しているわけではない。

まずその冒頭の序にあたる部分に次のようにある。

さても尾張の国に逗留して医術をおこなはれし療治の

品々を見るに、たゞ尋常（よのつね）の人とは見えず、されば竹斎といふ名のありての事か、又は実名をかくしての事かと有増知れる人に尋ね問ぬれば、いかにも能医者にて、何のなにがしと申たる人といふかたあり、又は学文をもよくつとめたる医者にて、療治はしかも上手なりしが、すこし思ひよりの下心ありて、此草子書れしと語る人も有

とあり、それに続けて唐の蕭京という名医が医者の心得の書を著し、医者を教え諭した話をひいて、

さて蕭京は陽（あらは）にその人の悪を取出してしかり、この竹斎はうらはらにて、陰（ひそか）にしかる心を内にふくみてかき、外はさらりと浮世のはなしにかくなり、能も心得たる人と見えたり、右の蕭京の鏡又は見聞たるところをもって、竹斎療治を評する物也、とる人は是をとれ（前田金五郎編『竹斎物語集』古典文庫、昭和四十五年による稿者の翻字。漢字をあて濁点、句読点を補う。以下同）

と書き、竹斎の一見滑稽と見える療治話には、当代の医者に対する批判が隠されているのだとしているのである。

一話例をあげてみる。

▲尾張名護屋にて宿をとり、看板をこそいだしけれ、天下一やぶくすし竹斎と書て、そばに一首の歌をかく扁鵲や耆婆にもまさる竹斎をしらぬ人こそあはれなりけれと書たり、さてもさても天下一とかくさへ上もなき自慢なる事哉と思へば、あまつさへ扁鵲や耆婆にもまさるとは、我朝にては天下一唐土にては扁鵲、天竺にては耆婆、是等の人にまさるとは、おびただしき事かな、唐土天竺我朝にすぐれたる此竹斎とは申たり申たり、驚入たるなんどとは愚かなる事也、此看板の様子を考るに、能もかかれたりと思ほゆる、いかにとなれば、まづ医者をば司命といふて、人の二つともなき一命を司どる大事の役目なれば、医者のならひみがくべきなどの事をつとめあきらめ、もはや是にては医の道にくらき事もなく、誰人にもをとるまじきと、手前をよくよくつとめかためて、居出、医者をば行はづとぞとおしへいましめたる看板のかがみなるべし、扨いづれの医者も誰殿にもをとる事にてはなひと、心には人々思ふべけれども、つとむべき事をつとめもせいでは、いかがあらんぞ、

などと、看板のかけ方一つから裏の意味を読み取ろうというのであり、この態度は全編を通して一貫徹底している。

最も極端な例では、幼子が井戸に落ちたところに通りかかった竹斎が、吹膏薬を戸板に塗って井戸の中の子を吸い上げようとして、その間に子が死んでしまうという滑稽以外にどう読んでも救いのない話でさえ、この著者にかかれば立派な含意がたち現れてくる。

扨も扨も書たり書たり、これはさて井のもとへ落たるも

のが何として吹膏薬にてあがるべきや、前の目鼻を一所へ吸いよせたるにあぢはふて、蓋にはせられたるや、倩此下心を案るに、是は医師への教、又は病人方への教なり、なぜにとなれば、医者たる人々、煩をなをしてやりたし、難儀を助てやりたしと思はぬ人は千人万人が中に一人もあるべからず。今日頭をそり医者になりて、いまださじの取やうもしらぬものにても、ころさんと思ふ心は夢いささか有べからず、此竹斎も井のもとへ落たるものをは上てたすけんと、こころ千倍思ふゆへに、秘蔵の膏薬を少計にてはなるまじきと、きてんをはたらかして大なる戸板にはぬられたり、しかれ共薬力およばず、療治のほしへあたらぬ故に、兎角する内に水を呑て死にけり、井のもとへ落たる療治のほしはいかなる事がほしなるべきぞ、なれば先はしごををろして取つかせ、ほそ引にて能々くくり、数人寄てはやく引上るを療治のほしとは申べき歟、扨皆医者衆へのをしへとは如何、前の通医者たる人は煩をなをし、苦悩難義をたすけいやさんと、寝ても覚ても思へ共、諸の病ひれうぢの薬力ほしへはあたらねば、かくのごとくおちあひの水をのみて死するがごとくぞといましめ教る心也、救たすけんと思ふ心有とても、ほしをはづしてころしなば、天地鬼神の大目には明かに見てきやつは殺たるぞと覚しめして、御悪（にくみ）有べし、勤べし勤べし、（略）扨又病人方への教の鏡とはいかなる事ぞと申さば、下手医者にかかれば、竹斎が井戸へ落たる幼児（おさあひ）を療治するやうにて、上るか上るかと思ふ間に死ることく、なをるかなをるかと思ふ内に死する事のみなるほどに、まづ始に医者をえらびて、よき医者にかかれとのおしへなり。

と、明らかに失敗譚であるにもかかわらず、強引ともいえる理屈で含意を付会している。このことは跋に、

右の評判は竹斎之隠旨を発揮するが如しといえども、未だ竹斎の微意に合うべきか否かを知らざる也。然りといえども、今日の評無きが如し。願はくば医病の両家此評に因りて、心を人命の重きに托せば、幸甚と爾云ふ（『竹斎療治之評判』跋文、原漢文を私に読み下した）

とあるとおり、「竹斎療治」を評判しているのではなく、「竹斎療治」が表面に立てず内側で評判しているところを酌んで代弁しているというのであり、『竹斎』自体が「評判」の書であるというのである。

多少の常套的謙辞を含むものではあろうが、著者自身が「未だ竹斎の微意に合うべきか否かを知らざる也」と告白しているように『竹斎』の療治譚をどう読むかということ以上に、実際には著者自身の意見の開陳を旨としているということなのではないか。しかし、それにしてもかなりの牽強付会であることには変わりなく、そういう意味で軍記物語の「評判」とはかなり違ったものになっている。これもまた、先に

取り上げた『徒然草嫌評判』とは逆の方向ではあるが、同様に評判の対象とは遠く隔たっているといえよう。

本文の最後は「扨全部ともに評すべき事なれども、予がわざならねば、唯療治の所ばかりを評し畢」と、『竹斎』の療治譚以外の部分にも同様の評判を逐一付けられることを匂わせて終わっている。その言に沿って『竹斎』という作品をどう読むか。『竹斎』を滑稽話としてだけではなく当世への批判を込めた書であるという読み方は可能ではある。例えば、京内参りの北野で竹斎が目撃する上人の堕落ぶりや各種技芸のことなど。しかしそれはあくまで当てこすりや軽い皮肉といったものであり、その当世批判自体がこの『竹斎』の目的とするところではなく、やはりこの作品の全体は、慰みとしての滑稽を旨として著されているとよむべきであろう。皮肉や当てこすりは、滑稽を描くための手段のひとつではないか。

そういう『竹斎』を名古屋での療治譚に限ってのことではあるが、徹底的に批判・教訓の書として読むという立場をとる『竹斎療治之評判』についてはどう考えればよいのか。ひとつはそれ自体が硬直した生真面目さに対するパロディになっていると読むことも出来ようが、それはあまりにも近代的な解釈と考えられるし、先に引用したように著者自身によって生硬ともいえる著作動機が語られているところからみれば、この作品自体がパロディであると見なすのはやはり無理である。

西田耕三氏が「笑話と評」(『日本文学』47巻10号所収　平成十年十月)で笑話と評との相互の関係を考察し、「評」には「笑話をさらに新鮮なものにする機能」があるとするが、ここでの「評判」にはそのような機能はないといっていいし、むしろ笑話を硬直した一面的な寓話としてしまっていると考えられる。

5、おわりに

以上ここで検討した仮名草子二作品の「評判」の特徴は、対象となるものが本来の「評判」の対象たり得ないものであることに起因するのではないか。

ともに『文体明弁』のいう「史評」ではないことは、片や『徒然草』という「史書官」の手にならない過去の随筆作品を対象にし、片や明らかに虚構された笑話を対象とした評判であることから明白である。では『文体明弁』に言うところの「雑評」かといえば、おそらく「雑評」に最も必要であると思われる当代性をその対象は持ち合わせていない。見かけの上では両書ともにその対象とは関わりなく作者の意見・思想を付会しており、意見・思想を述べるだけであればなにも「評判」の形を取る必要はなかったであろう。『徒然草嫌評判』の述べるところは、『徒然草』を使わずとも、例えば『海上物語』や『因果物語』のような形で構想できたであろうし、

『竹斎療治之評判』の主張しようとするところは、『竹斎』を使わずとも医学書として実現できたはずである。

これらは「評判」という書名を持つものの、『太平記』をはじめとする軍記物語の「評判」を最も形骸化した形で受け継いでいるといえるし、当代の人物・事物に即して評判する「評判記」とも全く違うものになっている。「今按に、平家物語は元来稗官の史、兎園の策なれば、評を加ふるにたらぬものなれど」と『平家物語』でさえ「評判」するに足りぬとする『平家物語評判瑕類』の言を用いるとすれば、ここでとりあげた仮名草子二書など最も糾弾されるべきものであろう。

一方で、ありとあらゆる話題が教訓を引き出すに足る素材であり教訓を引き出せないものはない、というこの二作品にみられる方法は、中世以来の『源氏物語』『伊勢物語』等の古典注釈における方法を、ある意味で極端なまでに突きつめた、やはり特異なものだともいえる。

ただし、ここでは触れなかった『可笑記評判』はまさに当代を批判した『可笑記』を対象に即して評判したものであり、また万治三年という刊年は軍書の評判の出版からみても早い時期であって、浅井了意の時流を見る目の確かさを感じさせるもの。また、山岡元隣の『古今百物語評判』は対象は怪異であるが、その対象に即して丁寧に評を行っている態度には、前記二書のような強引さは感じられない。

本来なら『太平記』に対する「評判」や『太閤記』における「評」に続く正しい意味での「史評」は、徳川将軍家の歴史に対して行われるものであったはずであるが、幕府が当代の政治・家系に関しての言及を禁じている以上、その「評判」の方向はおのずと別の面に向かざるを得ないであろう。そうして「史評」は徳川家以前の軍書・軍記物語に向かい、「雑評」は当代の遊女・役者といった風俗に向かっていったのではなかったか。その模索の過程に、仮名草子における「評判」が位置づけられるのである。